
地獄の沙汰は何次第？

由加 しい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄の沙汰は何次第？

【Nコード】

N2488BA

【作者名】

由加 しい

【あらすじ】

平々凡々な日常こそが人生、を念頭に置く星谷時雨は、生き返った。「なに！正式に生き返るには善行を積まなきゃいけないだつて！」地獄の使いの少女（自称720歳）と生き返った少年と周りの仲間たちの学園生活。

平々凡々な日常は何次第？

「悪いことをすると、地獄に連れていかれるぞ。だから悪い事をしちゃいけないんだ。わかるな」

父の財布を勝手に持ち出した僕に、父は諭すような口調でそう言った。

まだ小学校に入りたての僕は、新しくできた友達と、近所の駄菓子屋に行くのにお金がなかったので、たまたま家に置いてあった父の財布を持ち出した。

それは悪いことだ、という自覚はあったので、父の言うことの内容には納得がいかないわけではなかった。

けれど、地獄というものが何なのかはよく分からず、たぶん怖くて二度と戻れなくなるお仕置き部屋みたいなものだと思っていた。

今になって地獄について考えてみると、よく分からないことだらけだ。

宗教によって理解が異なり、地獄にいるのは鬼や閻魔大王だったり悪魔だったりする。誰かが言っただけで見たなんて記録があるわけでもないし、ましてや写真やビデオを撮ってきたなんてこともない。本当に存在する世界なのかもしれないし、存在しない世界なのかもしれない。

15歳の春、僕はそんな地獄と呼ばれる世界の一步手前まで行ってきた。そこにいたのは、いかつい鬼でも醜悪な悪魔でもなかった。

気が付くと暗闇の中にいた。自分の姿すら全く見えなくらいに深い闇。これは間違いない望んでいない非日常。

なんでこんなところにいるんだろう……。順を追って思い出してみよう。

確か今日は、ゴールデンウィークも過ぎ去った5月9日。朝の二
ユース番組で「アイスクリームの日」とか言っていた。正直どうで
もいいけど……。

朝はいつもどおりに起きて、朝食のトーストを食べて、身支度を
して高校に行くために自転車を漕いでいた。気温はそこそこ涼しい
くらいで、いつもと何一つ変わらない日常だった。

しかし、家から自転車ですら三分ほどの交差点に差し掛かったところ
で、「平々凡々な日常こそが人生」を念頭に置く僕の日常は、音を
立てて崩れ去った。

歩行者用の信号は確かに青だった。スピードを出したトラックが、
信号無視をしていきなり横から激突してきたのだ。全身を駆け巡る
激痛とともに、僕は宙を舞い、地面に打ち付けられた。

周りの人が「キヤー」とか「きゅ、救急車を」とか騒いでいる。

そんな中、体が壊死する兆候なのか次第に痛みは感じなくなり、意
識を失った。

ここまでは大丈夫だ。ちゃんと覚えている。なのにそこから先が
ちつとも思い出せない。

こんな暗闇が病院であるはずもないし、自分の部屋でもない。と
なると、ここはやっぱり地獄か夢なのだろうか。

「はあ、おれの人生もここまでか……」

どうせ誰にも聞かえないだろうと思ひ、呟いてみる。

「そんなことないわよ」

ぼくはいきなりの声に驚き、声のした後ろを振り返ってみる。

そこには少女がいた。

二回目の人生は何次第？

恐らく声の主のその少女の周りだけが、不思議なことに光を帯びていた。

周りの暗闇に負けず劣らず、しつとりと黒いロングヘアは、彼女の醸し出す落ち着いた雰囲気とよく合っている。また、着物ともよく合っていて、まだ少し幼さの残る化粧っ気のない顔ながらも妖艶な感じがする。

たぶん年上なんだろうなあ、なんて思う。

「歳、幾つですか？」

つい勢いで女性に聞いてはいけないことを聞いてしまった。そもそもこんなわけの分からない状況で、気にする必要があるのだろうか。

「そうね。ニンゲンは一年で一歳だから……、換算するとだいたい720歳くらいね」

換算するとだいたい720歳くらい、だって？

ますます理解が追い付かない。

いきなりの暗闇で振り返ると720歳の発光少女(?)。

なんて支離滅裂。

ああ、これは夢か。夢なら早く覚めて欲しいものだ。でもトラップに跳ねられた痛みはリアルだったなあ……。

……痛み？

あれ？ じゃあこれは夢なんかじゃなく……。

「私、変なこと言いましたか？」

目の前の少女(?)は不思議そうな顔をした。

「あ、そういえばニンゲンの平均寿命は80歳程度でしたね。驚くのも無理ないですね」

彼女の柔らかい声に包まれ、僕は自分のすべき質問の整理ができた。

「質問……いい？」

「勿論です」

「これは夢？ ここはどこ？ 君は誰？ 女の子？ 今何時？」

整理なんか出来てなかった。

「そうですね。色々説明しないとけないので、簡単に答えますと……」

彼女が落ち着いた口調で語りはじめたので、半信半疑で聞いてみる。

「まず、これは夢ではありません」

「夢じゃないのか……。ということはトラックに撥ねられたのも」

「はい、夢ではありません。痛みが激しすぎるようなので精神と肉体を切り離してもらいました」

切り離すなんて、そんなことができるのか。やっぱりまだ信じられない。

「それで、ここは地獄と現世の狭間のような世界です。地獄の手前といったところでしょうか」

地獄の手前。なんて実感の湧かない言葉。

「ここまでは大丈夫ですか？」

「はあ、なんとか」

「じゃあ続けますね。私についてですが、名前はカノン。性別はニンゲンでいうところの女ですね」

「人間じゃないのか？」

「はい、魔族といった存在です。ニンゲンでいうところの悪魔や鬼のような存在です」

魔族に悪魔。普段聞き慣れない単語が出てきた。それに、また「ニンゲンでいうところの」だ。

外見が人間なのに、全く違う存在であることにどこか嫌悪感を覚える。

「この世界には時間の流れというものは存在しないので、現時刻はトラックに撥ねられた8時頃ですね」

彼女は一通り説明を終えたようで、一息ついている。

「こんなところですけど……、大丈夫ですか、星谷時雨さん」
「はい」

いきなりの名前を呼ばれたので、勢いで返事をしてしまった。あれ、僕、名乗ったっけ？

正直、内容の理解はできたのだが、事実としてこの状況を飲み込めない。

「唐突に精神の切り離しだとか、魔族とか言われても、信じられないというか……」

「それでは」

そう言っただけで彼女は、近づいてきた。

近づくにつれて僕の体は明るく照らされて、見えるようになる……はずなのに体が見えない。そういうえば精神がどうだとか言っただけ。すると体はやっぱり置き去りに……。

「これを見てもらえば、信じていただけでしょう」
彼女が掌をこちらに向けたその瞬間、暗闇が見慣れた光景に変わった。

いつもの豆腐屋、いつものコンビニ、そしていつもの交差点と信号機。

なんだ夢か、と思いたいが目の前には例の少女（もう少女でいいや）。やっぱり夢じゃない。

近くにはトラックと人だまり、そして無造作に間接のない人形のような歪な姿の自分。

突如吐き気が込み上げてくる。こんなに自分の体を気持ち悪いと思ったことはない。もう堪えられない。

「わかった。わかったからもう……」

掠れた声に応じるように周りは暗闇に戻る。自分は死んだんだ、ということに実感が湧いた。

「すみません、大丈夫ですか」

彼女は優しい声で言う。

「それでは、状況を理解してもらったところで本題に入ります。なんと、あなたには生き返るチャンスがあります」

パチパチ、と彼女は重い空気を吹き飛ばすように拍手を始めた。何だつて？

またもや唐突なことに困惑する。

「詳しい話は別の落ち着いた場所で、ゆっくりしましょうか」

先程までとは打って変つて明るいついで彼女がそういうと、辺りが真っ白になり、訳の分からないまま、また気を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2488ba/>

地獄の沙汰は何次第？

2012年1月9日02時48分発行